

私は商学研究科の浅井ゼミ（リスクマネジメント論）に、2022年より在籍しております。寄稿の趣旨に従い大学院への進学の動機、ならびに現在の研究内容に関して、思うところを徒然記してみたいと思います。

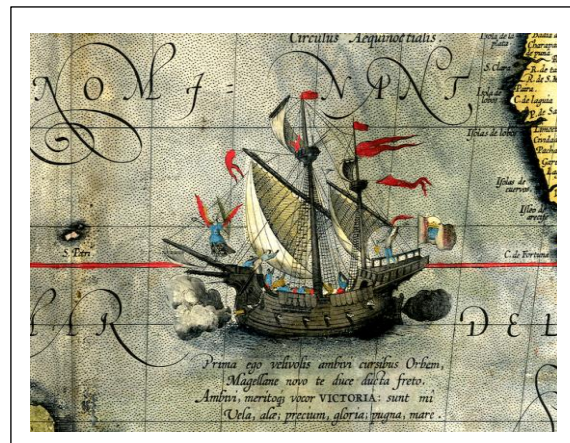
【志望動機】

損害保険会社を定年退職し、企業保険代理店の経営に携わっていた私が、漠然と大学院で学びたいと思ったきっかけは、聊か情緒的なもので、「予てより興味があった廻船問屋の北前船が遺した航跡について、寄港地の沿岸各地を巡りつつ研究をしてみたい」と思い立ったことである。

私と北前船を結びつけたのは、大学卒業後に就職した会社の由来に遡る。私が入社した日本火災海上保険は1892年に、東京海上、東京火災（後の安田火災→損保ジャパン）に次いで誕生した日本火災がルーツであり、当時、我が国の近代産業を牽引していた大阪紡績（後の東洋紡）を中心に、大阪の綿業10社が発起人となり、関西初、日本で三番目の損害保険会社として設立された経緯がある。その4年後にやはり大阪で誕生した日本海上と合併して、戦後は日本火災海上保険として歴史を刻んだわけであるが、日本海上の設立に関わったのが、北前船の5大船主の一つで、手広く廻船問屋を営んでいた福井河野村の右近家である。保険業が海運業と深く関係していたことが歴史の上で読み取ることができる。

保険の歴史と言えば、世界に目を向けても大航海時代の17世紀ロンドンにおいて、北イタリアの海運業者、貿易商等がEdward Lloydの経営するCoffee Houseに屯し、海事ニュース（Lloyd's List）をもとに互助制度として海上保険をスタートしたことが始まりであると言われている。

私が在職していた40年近くの間、日本火災海上から日本興亜損保、損保ジャパンへと、合併再編により社名は変わったが、常に自社のルーツである北前船には思いを馳せており、定年後はライフワークとして損害保険の源流を辿ってみたい思っていたところである。



当初はそのような動機ではあったが、いざ大学院の門を叩くとなると、そこには時流に乗った様々な研究分野が広がっていることを思い知らされた。もとより、シニア受験の研究課題には、「25年以上の現業経験に基づく」ことが要件とされ、この制度では単なる歴史探訪趣意は受け入れられないことがわかった。ただ不思議なことに一旦火が付いた学びへの思いは失せることなく、「それならば」と仕切り直しを行い、これまでの経験をもとに、自分なりに新たな研究に取り組むことを決意した次第である。

在職期間を振り返ってみると、国内、海外の現場で、一貫して企業分野の営業社員として開拓に汗を流し、また商品開発や人事、広報など組織を俯瞰する部署を経験してきたが、いずれも保険の供給者側（メーカー）の考えに基づく仕事であり、受益者すなわち、ユーザー側の志向や動向について考える機会が少なかったことに、ふと気が付いた。そういったことから、実績のある明大商学部の保険系列の講義の中で、中小企業の保険需要を消費者目線で研究されている浅井ゼミの門を叩くこととし、今日に至っている。

【研究内容】

研究の内容は、中小企業における損害保険の有効活用の分析で、日本の産業構造において法人数の99%以上を占める中小企業を対象に、それらの組織が資金調達やリスクマネジメントの側面から、どのように損害保険を捉えているか、つまりその動向に焦点を当てて、実証的に研究を行うというものである。

日本の損害保険市場（除く共済）は、3メガ損保グループ（東京海上、SOMPO、MS&AD）がM/Sの9割を占める寡占市場で、2500社を数える米国、数百社が存在する先進諸国に比べて販売方法、保険商品が画一的であることに特徴がある。1990年代後半からの保険金融行政の自由化により、通販による販売方法や、商品内容に自由度が広がってきたとはいえ、大勢の変化はグローバルスタンダードとは程遠いのが実情である。

世界の損害保険市場の中で、日本の市場は米中に次ぐ規模（約10兆円）ではあるが、金融リタラシーの欠如と歩を合わせるかの如く、保険も販売、購入の双方においてリタラシーの不足は明白で、保険への意識は中小企業の経営者といえども、決して高いとは言えない状況である。他方、供給する側の保険会社はプロダクトアウトの発想で、画一商品の多量販売といったスタンスが主流である。そこにはシステム投資見合いの商品開発や、効率的な販売戦略も背後にあるが、保険の持つ本来の役割であるリスクマネジメントをいかにしてユーザーに伝えていくか、それは私が在職中に常に意識していたことでもある。

現在は、浅井先生、中林先生のご指導のもと、毎週、web of science より各国の保険事情の文献を選び分析している。企業周りの環境は、経済活動や技術革新、組織の多様化に伴い複雑化しているが、そこから派生する賠償リスクについて、特に、取締役並びに役員の賠償責任保険（D&O）に焦点を当て、関連する分野にも広がりをもって取り組んでいる。

今では自らが北前船となり、ある時は風の赴くまま、またある時は風待ちの港（探求分野）を巡りながら研究に勤しんでいる、という想いである。 2022.10.10 HY